朗読　こころ

1、　夏目漱石『こころ』を、朝日新聞の連載に合わせて朗読することにした。
2、　第二回目の朗読。
3、　第三回目の朗読。日課になってきた。
4、　これほど早い段階で「先生」の死が明記されていたとは、新たな発見。
5、　実は、小見出しが冒頭からいきなり「先生の遺書」となっていたので、不思議に思っていたのだが、これが新聞に掲載された当初そのままのものだった。単行本では、三部構成にまとめられ、この部分は「上　先生と私」とされた。「先生」の死を前提に読み進めるのと、推理小説風に謎ときをしながら読み進めていくのとでは、印象がまったく異なってくるように思う。
6、　第一週の朗読はここまで。このペースで漱石を読むというのも、非常に新鮮な気分がする。
7、　本日から、実際の掲載日と日付がずれてくるのが残念。ここまでするなら、掲載日も同じにしてほしかったと思うのは私だけ？
8、　朗読の際に、会話の部分をどう読むか、思案のしどころ。黙読の場合は、女性の声は頭の中で女性の声に響いてくるのだが、自分の声に出したとたんに妙なことになってしまう……。
9、　高校生で『こころ』を読んだときは、夫婦関係の綾などわからなかったはずだ。限りなく書生の「私」に自己を投影させて読んでいたように思う。
10、　今日から、昼間に朗読すると、何となく違った気分。掲載当初は、読者は朝読んでいたであろうし、漱石もそれを意識して筆を進めていたのであろうか。
11、　当時の「大学出身」というのは、「東京帝国大学」に限定されているとのこと。そして、大学院生の漱石が、嘉納治五郎のもと、東京高等師範学校でも教壇に立っていたとは……。
12、　「先生」や「奥さん」との実際のふれあいの場面と、「先生」の死後から回顧する叙述とが複雑に絡み合いながら物語が進んでいく点が興味深い。
13、　上野の東京国立博物館から鶯谷へ至る散歩道は新緑の今の季節が気持ち良い。漱石も季節的なイメージを取り入れながら書き進めていったのだろうか。
14、　漱石の文章は、特に会話文の中で、時折読んでいて意味がわからなくなることがある。単に言い回しの問題なのか、文のねじれのせいなのか。このゴツゴツ感が独特のリズムを生み出していることも確かである。
15、　読み間違いをしそうで、実際にも読み違えてしまう文体は、黙読の際には明らかに読み飛ばしている箇所であろう。実際に声に出してみてはじめて

判然る。驚いたこと。漱石『こころ』の今日朗読した部分は、1914 年 5 月 4 日の『東京朝日新聞』に掲載されたが、そのすぐ次の欄に、藤村の「仏蘭西だより」が載っていて、その内容は何と藤村がドビュッシーの自演で「子供の領分」を聴いたというものであった。考えてみたら、ドビュッシーは森鷗外と同い年。

16、　「私」を「わたし」と読むか、「わたくし」と読むか、別途書き込んだが、当時の同じ紙面に掲載されている島崎藤村の「仏蘭西だより」では、「わたし」とルビが振ってあった。ということは、当時の新聞では「わたし」と読むのが普通で、漱石の単行本の「わたくし」が異質であったのだろうか。細かいことだが、声に出して読んでいると妙に気になる。

17、　出先での朗読。部屋の響きが異なると読み方もそれに影響されるように思う。

18、　「奥さん」が「先生」のことを「先生」と呼ぶのは前回の（１７）から。妻が夫を「先生」と呼ぶのも不思議な感じがする。「奥さんは火鉢の灰を……」のくだりと、それに続く奥さんの感極まったことばは小津映画の一場面を髣髴とさせる。市川崑の「こころ」（1955）は見ていないが、奥さん役は新珠三千代。原節子だったら……とつい考えてしまう。

19、　やはり新聞に連載されていると、一話ごとにそれなりのまとまり感がある。そして翌日読みたくさせる仕掛け。

20、　「その晩」のことを「書くだけの必要があるから」書く「私」。そして、「その時の私には奥さんをそれほど批評的に見る気は起らなかった。」とする「私」。「奥さん」の謎めいた姿がここで立ち現われてくる。

21、　考えてみれば、「私」は大学生であるから、倒れたその父親は 50 歳ぐらいの年齢であろうか。「先生」などははるかに若い。そして、漱石は 49 歳で死んでいる。

22、　「私」が「先生」のもとを離れ、新たでかつ旧弊に満ちた人間関係の中に入っていくベクトル。

23、　郷里に帰った「私」をめぐる家族関係の描き方は、まさに小津映画に通じるところがある。小津は確実に漱石の継承者と言っても過言ではなかろう。

24、　病に冒されていた漱石だからこそ、病気に関する知識が豊富なのだろうか。漱石と懇意にしていた上田敏が腎臓病で突然亡くなるのは、この『こころ』が掲載された２年後のことで、漱石の亡くなるちょうど５か月前のことであった。

25、　『こころ』の時代は、大学の卒業が６月であったことがわかる。そして、卒論の執筆。はじめて『こころ』を読んだ中学生のころは、もちろんこの部分は実感を伴わない。卒論を書いた経験を持つ今となっては、漱石の一語一

句が妙に身に沁みる。

26、　心象風景を映し出すような描写。志賀重昂の『日本風景論』が刊行されてから、この時点ではすでに 20 年が過ぎているが、そうした明治以降に「発見」された風景を背景に、「先生」と「私」の道行が表現されているようで、興味深い。

27、　どうも漱石は日々書き進めていたようだが、こうした先を見越したような謎を散りばめていく書きぶりで、どこまでを射程に置いていたのだろう。新聞小説として読み直すおもしろさがここにある。

28、　妙に熱を帯びてくる「先生」の口調と、キッチュな印象を与える斥候長役の「小供」の対比。何とはなしにシュールな感覚。

29、　ストーリーの展開に、肩すかしを喰らわせられるような仕掛けも度重なる。一方で、背景の自然の描写が、じわじわと何かが迫ってくるような効果を与えているようにも感じられる。

30、　100 年前の「現代」小説を読むときの落とし穴。登場人物、普通は着物を着ているということ。「先生」の「小便」をするときの様子が妙にリアルだ。「先生」の内にあるこうした俗の部分が究極のエゴイズムへとつながっていくのであろうか。

31、　経験と思想の関係は永遠の哲学的な課題であるが、経験主義的な土壌の英国に留学し、英文学を学んで行き詰まった漱石が、ドイツ観念論やドイツの芸術が重んじられる当時の社会風潮の中、私小説が勃興しつつある文壇においてこうした問題について思索を進めていった点は興味深い。

32、　夏の卒業式に冬服を着なければならない辛さ。現代の応援団に通じるバンカラ風の風俗は、このあたりが端緒か。

33、　胃が悪い漱石がアイスクリーム好きであったとは興味深い。漱石のことであるから、相当甘いものが好みだったのではあるまいか。このような味覚や衣類の肌触り、家屋の空間性などから『こころ』の各場面を再構成してみると、思わぬ発見があるかもしれない。

34、　大病を患い、その後も病気がちな漱石が描く健康な「先生」像というものが、「奥さん」や「私」との関係性の中から立ち上がってくる。

35、　「先生」の家の庭の風景は、短い一段落ではあるが、訪れるべき何かを暗示するようで印象的。また、ビールがキーワードになってくるあたりで、ふと村上春樹を思い出した。

36、　「先生」の故郷が新潟であると明記されているのに対して、「私」の場合は「田舎」としか書いてない。兄が九州在住で、そう簡単には親元へ帰れないという点から見て、東北方面なのであろうか。そのあたりの探索もしてみたい。

37、　ここに見られる家族の微妙な関係はまさに『東京物語』そのもの。ロー・ポジションからのアングルという視点を獲得した小津は、「私」という一人称の語り手から自由になれたのではないかという気がする。

38、　「私」のモノローグには確かに会話文が多い。これを読みこなすにはやはり相当な役者の心得が必要であろう。実はこの一連の朗読はほとんど一発勝負。下読みをせずに朗読するので、途中でおかしなことになって、酷い場合は読み直し、というパターンである。あくまで連載の新聞小説を読み聞かせる程度の軽い気持ちなので、もとより完成度は考えていない。

39、　漱石の筆致は淡々としている。卒業祝いの準備に明治天皇の病を重ねてくるのは、当時の世相から考えてもかなり**大胆な仕掛けだったのではあるまいか。その部分が、修辞を廃した叙述文でさらりと書き進められている**のは興味深い。

40、　何とはなく寂寥感が漂う一節。しかし、漱石はけっして過激にならない。随分と抑制された筆致で書き進められている。そして明治天皇の病状がバッソ・オスティナートのように響く。

41、　東京から離れた郷里にいる「私」、その「私」とともに暮らしながら、新聞というメディアから刻一刻と受ける情報とともに病が進行していく「父」、「私」の知らないところで渦に捲き込まれていく「先生」。三人三様の生き様が明治天皇の死を背景に交錯していく。昭和天皇の死の折り、また、東日本大震災のときにかの地から離れた地に暮らしていた自分と重ね合わせ、この距離感を振り返る。

42、　「私」と「父」と「母」との会話の温度差は、いつの時代でも起こる普遍的な現象。そして、教師というプロフェッショナルな生き方を求めてあえて移動していく心性も、自分を含め、時代を超えるものであろう。

43、　たまたま新聞記事に漱石と鷗外の共通点について書かれてあったが、この 1914 年の鷗外は、前年に『ファウスト』の翻訳を出版し、明治天皇崩御後の歴史小説への傾斜が強まる時期であった。『山椒大夫』は翌 1915 年の出版である。また、当時の新聞紙面に鈴木大拙の『禪の第一義』の広告が出ていた。大拙が漱石と 3 歳違いの同時代人とは意外だった。

44、　父子のやりとりというのは、いつの時代も変わらない。逆にそこに入り込んでくる「先生」の「私」とのあまりの距離の近さは不思議なものに感じられる。蝉の声が油蝉からツクツク法師に変わっていく描写は、幼少の頃、夏休みを田舎で過ごした記憶に重なり、激しい郷愁を覚える。

45、　風呂で倒れても、それを支える家族がいることは、一時代前では当然のことであったのだろう。ヒートショックで父を失った経験から、改めて風呂場での卒倒という問題を考えさせられている。

46、　死期が近づいて親類縁者が次々と訪問するあたりは、非常にリアルな描写。交通や通信や医療がどれだけ発達しようと、余命幾許もない病人に対峙するために駆けつける様は時代を問わない。

47、　今日の新聞の漱石の紹介記事には、参禅の話が出ていた。27 歳で参禅したということであるが、何かを求めて坐ると、かえってそれにとらわれてしまうのだろう。父親の死を目前にした「私」の描写の中に、「父母未生以前本来の面目」に対する漱石なりの答えが示されているのではなかろうか。

48、　『こころ』を執筆するきっかけともなったと言われる乃木大将の死。読み返してみると、意外にあっさりとした筆致で書かれている。明治天皇、乃木大将、「父」、「先生」の死の結節点とも言うべきこの箇所には登場人物も多く、様々な情景が交錯し、朗読のハードルが高まった感じ。

49、　電報と手紙とのタイムラグが不安感を増幅させる装置として巧みに埋め込まれている。それにしても、手術入院、闘病は辛い。「前立腺がん」をして 1 か月間、文字通り病床に釘付けにされたときのことをつい思い出した。

50、　死の床に集う家族の重苦しいながらも微妙な雰囲気が巧みに描かれている。兄弟関係などは、いくらもことばを用いていないのにもかかわらず、妙に生々しいものに感じられてならない。蚊帳のウチとソトという設定の妙。

51、　兄弟間のわだかまりが巧みに描かれている場面であるが、末子の漱石が実際に兄との間で経験したことなのではないかと思わせるふしがある。そして、「イゴイスト」ということば。『こころ』の執筆直後の 11 月に、かの「私の個人主義」の講演が行なわれた。

52、　生の行きつく果てとも言うべき、前半のクライマックス。なぜか朗読の最中、外は篠を突く大雨。読み方もつい慎重にならざるを得なかった。

53、　状況が逼迫し、不安な思いが錯綜する場面で、漱石の筆致は冴えわたる。語り手の意識が、「私」から「先生」へと憑依する瞬間ではなかろうか。

54、　自分の父を差し置いて「先生」のもとへ走る「私」。緊迫する場面ではいきおい読むスピードも速くなる。一気呵成に読んでしまった。

55、　「先生の遺書」に入ると、手紙文ということもあるが、明らかに漱石の文体は異なってくる。会話文が入ると何となく文章が構成的に飛躍する感があるが、手紙文には一種独特の粘りが出てくる。この違いは音読すると非常にはっきりとわかる。

56、　「先生」の遺書は、本来、真面目な「私」のためだけに書かれたというレトリック。結果的には何千万、いや何億人の日本人や世界の人々が読んでいるという不思議な構図がある。

57、　遺書の始まる直前に「私」が父親の死の床に付き添っており、それがこの「先生」の両親の死にオーバーラップしてくる。そして、中途半端に口に

出された遺言と、今まさにしたためている遺書と。どちらがより真実なのか、と漱石に問われているような気がする。

58、　「先生」の来し方が「私」に微妙に重なってくるのであるが、ズレも出てくる。昔の学生気質が粗野で質朴であったという認識は、いつの時代でも言及されることであるが、これは単にノスタルジーがそうさせているのであろうか。

59、　漱石は東京出身であるが、田舎の名士の家の雰囲気と、それをとりまく人間模様が不思議なほど巧みに描かれている。旧家の饐えた木の香りまで伝わってくるような文章の力。

60、　自由、結婚、恋愛などのモチーフが出てくるが、この部分ではそれらがまだ深まりを見せない。このあたりが後半の伏線となっていくのであろうか。

61、　親類の心変わりへの気づきと初めて異性を意識することのアナロジー。世界が掌を翻すように変わるという点では共通するのであろうが、心の方向性としてはかなり異なるものなのではないか。

62、　財産問題の詳細への言及を唐突に端折っているのは、漱石自身が執筆しているうちに興に乗ってきてしまったからであろうか。自らの生い立ちを想い起こしながら、昂奮し、熱した舌で平凡な説を述べ始めてしまう漱石の人間味。

63、　前日の文面では端折るつもりでいたにもかかわらず、つい財産問題に引き寄せられていく「先生」の心のありようが興味深い。時代的に『金色夜叉』が盛んに映画化されたり、舞台にかけられたりで、金と人情が当時の大きな問題であったことも背景にあるのかもしれない。

64、　「先生」が家を探す場面。幼少のころより慣れ親しんできた地名。そして土地の記憶。もちろん現在では昔時の面影すらないが、東から本郷台地、小石川台地、小日向台地、関口台地、と地図に色塗りをした小学校の記憶が甦る。←　東京都 23 区の色分け、浅草の小学校に通っていた。

65、　漱石の描く恋愛には、『それから』以降、どうも男女の非対称性が募ってくるように感じられる。ときにはそれが滑稽な印象すら与える。

66、　人の呼称が変わっていくことについてわざわざことわりを入れる点が興味深い。「未亡人」から「奥さん」へ変化するのであるが、本来は「お義母さん」であるはず。そして、現在の妻である「お嬢さん」がそのままというのも、不思議な感じがする。

67、　「先生」の下宿先の間取り図は、微妙に異なるものがネット上に何種類も公開されている。とはいえ、襖一つで隔てられる日本間に年頃の男女が生活するということは、人間関係の形成に随分と影響を及ぼすことであろう。

68、　母娘の家庭に若い男性が下宿人として入り込むという設定は、確かに波

乱含み。そこで人間関係が複雑になる様子を冷徹に織り成していく漱石の筆致の鮮やかさ。

69、　猜疑心が猜疑心を再生産していく過程。このスパイラルに巻き込まれながら、愛を感じ、円滑な関係を保っていかなければならない苦しみ。それらがドロドロとした書きぶりで描かれない分、より際立ってくるように感じられる。

70、　猜疑心や嫉妬といった感情は、負のスパイラルに陥るかぎり、確実に累積していく。その心理描写は見事であるが、連日、新聞紙上でこれを読み進めていくのには苦痛を伴う。100 年前の読者は如何なものであったろう。

71、　友人の挿話や三人の買い物話など、情景に変化が見られる場面。この数日間、猜疑心の心理描写に追い込まれていただけあって、一息つけるような書きぶり。

72、　もう一人の男が家に入ることの予告。ここにすでに「私は手もなく、魔の通る前に立って、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。」という表現が見られる。「瞬間の影に一生を薄暗くされ」るという暗示は秀逸です。

73、　「K」の登場。その形容として、真面目、精進、坊さんらしい、頑固、大胆、道、一図ということばが、彼の回りに鏤められている。初っ端から極めて明確な輪郭を描いての登場といえるだろう。

74、　聖書を読んだり、コーランを読みたがる「K」は、頑固一徹の性格である一方で、教養主義的な人間であるともいえる。大正期を先取りしている明治時代の若者像とも読める人物描写だ。

75、　「K」の養子縁組や復籍の経緯を見ていると、それが漱石の来し方と微妙に重なってくるのが興味深い。家族関係の複雑さが性格形成に与える影響を考えていくあたりも、漱石ならではであると言えよう。

76、　「先生」が漱石の分身であるとするのは穏当であろうが、実は「K」も明らかに作者自身がモデルになっているように思う。強迫的に神経衰弱に陥っていく様子はもちろん、それを見つめている「先生」の眼があるという点が重要である。この両者の設定は夢幻能の世界を髣髴とさせる。

77、　ある意味では当然のことかもしれないが、「先生」は人々の関係性をすべて自らの立場から組み上げている。他者の視座がまったく欠落しているために、他者との決定的な対立を起こすことなく自滅の道を辿ることになってしまうのではなかろうか。

78、　漱石、「先生」、「K」という三者を統合的に読み進めていくことで、一人の人格の多様な側面が見えてくるかのようである。胃に関する医者の説明のくだり（ここは文の切れ目がなく、読むのに閉口する……。）は、肉体的に

健康な登場人物からではなく、明らかに胃病を患っていた漱石の肉声であるし、「K」を語る「先生」を語る漱石という入れ子構造も見てとれる。

79、　避暑に出かけていたため、久しぶりの朗読。三回分まとめ読みをすると、一回ずつ読むのとはまた違った感覚になる。ジェンダーの視点から見て、「先生」の「性によって立場を変える」という認識は興味深い。

80、　「先生」の猜疑心がむくむくと頭を擡げてくる。ある意味では、財産問題をめぐる猜疑心がこの場面の伏線になっていたのだとも考えられる。それにしても、若い女性がよく笑うのは今も昔も変わらないものだと改めて思う。

81、　猜疑心が嫉妬へと移ろっていく様子が、夜の散歩というエピソードを挟みながら、巧みに展開されていく。能の世界では女性の嫉妬心が相手と自分を苛むのであるが、それを男性に翻案したかのような物語の展開が感じられる。

82、　この小説の主たる舞台は都会の室内空間であるから、このような海のある風景については漱石の筆致も異なってくる。小説冒頭の鎌倉の海水浴場との鮮やかな対比が感じられる。小・中学校の臨海学校で行った保田、岩井、富浦は、この当時から学生の集まる海水浴場だったのも興味深い。

83、　「先生」は「今の貴方がたから見たら……」のような言い方をよくするが、このフレーズはそれぞれの時代で際限なく繰り返されてきたように思う。しかし、時代の閉塞感が募るとそうも言っていられない事態に直面することにもなる。

84、　道行文は通常男女の旅の姿を描くものであるが、ここは男同士の道行とでもいえよう。それにしても、保田から銚子までの海岸沿いを歩くと優に180km は超える。（かつて入院中に「木屑録」を読んでいた）男女の道行は何とも悲痛なものであるが、実はこうした長距離を徒歩で旅をし、その結果、着物が垢じみて汗臭くなっているということを漱石の写実文で気づかされるのは興味深い。

85、　朗読を続けていると、その日の体調にもよるのだろうが、すらすら読める日とそうでない日とがある。一般的には文が長くなると、どこにポーズを置くかが瞬時に判別がつかずに、読みにくくなるものであるが、今日の部分は読んでいても何となく文の構造がつかめず苦労する箇所が多いように感じた。

86、　「御嬢さん」の後姿がちらりと見えるという部分は、映画の一場面をスローモーションで残像をつけて見るような鮮やかな描写。全編モノクロ映画で、この部分だけカラーになるような感覚とでも言えようか。

87、　夏の旅行から一気に 11 月にさしかかる。「先生」が、「K」と「御嬢さん」とに偶然出くわすという場面には、寒さと雨というモチーフが効果的に使わ

れている。また、しんと、どろどろ、そろそろ、はたりと、ふん、ぐるぐる、ぼんやり、どしどし、というように、オノマトペが多用されているのも特徴的である。

88、　--

89、　「先生」の目から見て変わることのなかった「K」が変化するのは「不意」のことであり、「敷居の上に立ったまま」話し始めるのである。これに対して心持ち火鉢を押し遣るという動作が非常に印象的に感じられる。

90、　いよいよ一つ目のクライマックス。朗読も一気呵成にといったところであろうか。それにしても、これだけ全編の最重要の告白部分であるにもかかわらず、「K」の語った内容については、「彼の御嬢さんに対する切ない恋」とのみ記されていて、直接話法はおろか、間接話法ですら表現されていない点が秀逸である。語り手と聞き手の、姿と心の動きとを描くだけですべてがわかってしまうような仕掛け。

91、　「Kの自白に一段落が付いた」と言いながら、その具体的な内容がまったく知らされない読者には、謎が深まるばかりである。それでいながら、自白を聞かされた「先生」の動揺には不思議とシンパシーを感じるところが漱石の語り口の巧みさなのか。

92、　人力車の「ガラガラいう厭な響」、「晴着が脱ぎ棄てられたまま、次の室を乱雑に彩どって」いる様子、「どろどろした蕎麦湯」といった尋常ならざる生々しい皮膚感覚に対して、深夜襖を隔てて「おい」だけで応待する男二人。このあいだを時間的、空間的につなぐものが「洋燈の光がKの机から斜にぼんやりと私の室に差し込」んでいる情景。

93、　自らの心の中の「K」的なるものというような仮定のもとに読み進めていくと、奥行きが出てくるような感じがする。隠し立てする必要もないのに伺い知ることのできない自らの心の闇とでもいうものであろうか。

94、　時代を超えた図書館の風景。そして、図書館で他人に遮られることによる苛立ち。場面が室内から室外へ移っても、情景は描かれずに、心理描写に食い込んでいく。「隙かさず」、「一歩先」に対峙する「苦しそうな所」が際立つ。

95、　心の葛藤が凝縮された場面。二度繰り返される「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」という言葉。地の文と房州旅行の際のものとを合わせると都合四回登場する。もう一つのキーワードの「精進」は全部で三回。いずれもこの回が最後の登場である。

96、　「私がこういった時、脊の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。」という表現は、映画の一場面を見るような感じ。そして、「K」の「覚悟」。これは確実に後の展開の伏線となる。また、公園

の風景描写の一文は、全篇の白眉ともいえる印象的な表現。

97、　漱石の深夜の描写はハッとさせられることが多い。「黒い影法師のようなK」とのやりとりは、鮮烈な印象を与える。Doppelgänger（自己像幻視）としての彼の存在そのものが、増幅していくような恐怖。そして、「覚悟」というキーワードの持つ重み。

98、　「K」の「覚悟」のミスリーディングと、自らに使用する際のズレと。このズレが拡大していくという思い込みが問題を拗らせていくのであるが、実は、「K」の「覚悟」は、例えわかっていたとしても、彼の性格からして、どうにかなる種類のものではなかったであろう。

99、　「御嬢さん」との結婚問題は急転直下。確かに「奥さん」は明治時代の軍人の妻の一つの理想型であったのだろう。それに引き換え、家を抜け出したうえ、往来で「御嬢さん」に行き合う「先生」のバツの悪さ。この感覚は妙に現代的なにおいがする。

100、　「猿楽町から神保町の通りへ出て、小川町の方へ」の界隈は、それこそ古本屋をひやかすのによく歩いた。そこからさらに小石川までというと、やはりかなりの距離になる。とはいえ、自らの結婚問題を考えるには、けっして長くはない距離。そして、宅に戻るなり「K」に対する良心の呵責に襲われる不条理。

101、　「奥さん」の見た「K」の「変な顔」、「最後の打撃」ととらえた「先生」の認識、「そうですかとただ一口いっただけ」の「K」、そして「御嬢さんの挙止動作」。ここから四者の思惑の乖離が確実に始まっている。

102、　この一文のために『こころ』全巻があるようなもの。「もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横わる全生涯を物凄く照らしました。」

103、　「K」の頭が非常に重たく感ぜられた、という部分は生々しい皮膚感覚を伴っている。そして、「冷たい耳」よりも、むしろ「平生に変らない五分刈の濃い髪の毛」が配置されていることが、その皮膚感覚を際立たせている。「私は時々奥へ行って……」の一段落は、この段のみ歴史的現在の表現が用いられている。

104、　軍人の未亡人としての「奥さん」の態度は絵に描いたようなもので、印象的な場面の一つである。また、血潮の大部分が蒲団に吸収されてしまったという表現はひどく生々しい。そして、悲しみのために胸が寛ぐというのも言い得て妙である。

105、　教壇に立っていた漱石が叱責した藤村操が華厳の滝に投身自殺したのが 1903 年。その友人の死について魚住折蘆が「自殺論」を著したのが 1904 年。その折蘆も 1910 年に亡くなり、彼と論争した石川啄木も 1912 年に死

亡。漱石の回りで有能な弟子たちが次々と亡くなる。特に藤村と折蘆の関係が、新聞記事まで登場させる『こころ』の一つのモデルになっているのではないか。

106、　「猛烈な勢をもって勉強し始め」、「その結果を世の中に公けにする日の来るのを待」っているというあたりを読むと、『こころ』という作品が、ますます魚住折蘆の「自殺論」へのオマージュではないかという思いにとらわれてしまう。去り行く明治と夭折した明治の青年たちへのレクイエム。

107、　『こころ』を初めて読んだ高校生のころは、もちろん「酒に魂を浸」すことなどわからなかったが、今でもそういう飲み方は一切しないので、やはりわからない。しかし「飲める質」の人間の飲み過ぎた翌日の気分はよくわかる。そこを通り過ぎ、「寂寞」へ至り、淋しさの深みに嵌っていく「先生」。そこではじめて「K」と共振できるという悲しさ。

108、　「影が閃く」というのは印象的な表現であり、「K」の自殺の場面に通じる。ふとブータン国王の経験を食べて成長する龍の話を思い出した。そして、村田珠光の「心の文」。「心の師とハなれ、心を師とせされ」。ここではその心をコントロールできなくなっていくプロセスが描かれる。同時に「則天去私」の世界がちらつく。

109、　不安が募っていく強迫神経症的な様子が丁寧に描かれている。そしてその行き詰まった先に「明治の精神」が登場する。このことばは全編で二回しか登場しないが、不思議な重みを持つ。明治天皇の崩御、乃木夫妻の殉死、そして昭憲皇太后の崩御が『こころ』掲載開始の直前ということで、漱石の一世代上が築いた明治が崩れ去っていくという実感はあったかもしれない。しかし、妻と心中できない「先生」は、明治とともに歩んだ近代人なのである。

110、　最終回。様々な要素が重層的に織り成す構成でありながら、謎を残したまま高転びするような終結。確かに漱石の上の世代の幕末の志士たちはいとも簡単に腹を切ったし、それが名誉でもあった。その次に来る世代が、血の色を見せずに、明治の精神に殉死するとは、どのようなものなのであろうか。